

旅が教えてくれたこと ～ビッグウォールを巡る旅～

増 本 亮 (同人クライミングファイト)

クライマーの言う「一回だけ」は一回で済むことはまずない、というのが私がクライミングを続けてきて得た教訓のひとつである。

私たち夫婦は2018年7月から2019年2月にかけてカナダ、アメリカ、アルゼンチン、チリの4か国を巡る旅に出た。ただただひたすらその時自分達の登りたいところを目的地として移動していく、とても贅沢な旅だった。こんな旅をするのが二人の夢だった。一生に一度でいい、二人の夢を叶える旅をしよう。そう二人で語り合い出発した。旅は喜怒哀楽、様々なドラマと多くの素晴らしい出会い、自分の限界に挑戦するような充実したクライミングに満ちたまさに夢のような時間だった。8ヶ月という時はあっという間に過ぎ去った。そして旅を終えて私たちが真っ先に考えたこと、それはクライマーの教訓にのっとり再び旅に出ることだった。2019年10月、私たちは北米から南米への5か月の旅に出発した。

フリーライダー

今回の旅の目的は前回やり残してしまった目標を完成させることだった。従って前年のように様々な目的地を移動していくのではなく、ヨセミテとパタゴニアの二か所に腰を据えてじっくりと目標と向き合うことにした。

ヨセミテでの目標は妻のフリーライダー完登と、私のサラテルートのフリークライミングである。エルキャピタンはいつも通り凄まじい迫力と威圧感で私たちを迎えてくれた。ただ私はこの岩壁に対する今までにはない親近感も感じていた。さながらホー

ムマウンテンである瑞牆山にいるような感覚だった。ここ数年この壁で過ごした時間が、私とエルキャピタンとの距離を近づけてくれたようだ。

2018年の妻のフリーライダーのトライは僅か1ピッチに完登を阻まれた。それは私の予想を遥かに上回る結果で、大きな驚きと喜びを生んだ。昨年ヨセミテを去るときから、フリーライダーを完成させるために再び戻ってくるべきだと強く感じていた。それが今回の旅の最大の原動力と言ってもいいだろう。

私の役目は如何にして完登に結びつけるか、戦略を練り上げることである。昨年のトライを分析しそれに今までの私の経験を踏まえて組み立てていった。何度もこのルートを辿っている私たちにとって、未知なるものへの冒険性はほぼ無いと言ってもいい。このクライミングは純粋な肉体的及び精神的な限界へ挑戦と言える。そのため私はなりふり構わず「完登」することに重きを置いた。そして私が導き出した戦略は以下の通りである。

①二泊三日の日程で、昨年レッドポイントできなかったテフロンコーナーをレッドポイントするためにルートに取付く。テフロンコーナーまでは妻の疲れを蓄積しないようほとんどのピッチを私がリードし荷上げする。ここでの重要な狙いはテフロンコーナーワンピッチの攻略。自分なりの登り方を見だし体に覚えこませ、レッドポイントすることでアタック時に精神的な重圧を小さくすることだった。トライ後は、アタック時の荷揚げの負荷を軽くする為に幕営道具やポータレッジなどの装備をそこにデポし下降

する。

②アタック用の水や食料、燃料などを背負い、エルキャピタン山頂に徒歩で登り、そこからフリーライダーのラインを懸垂下降する。ここでは第二の核心部であるエンデューロコーナーを練習することと、アタック時に使用する物資のデポが大きな目的だ。エンデューロコーナーにおける体の動かし方とプロテクションの確認をして、アタック時にここで躓かずにスムーズに登れるようにしておく。

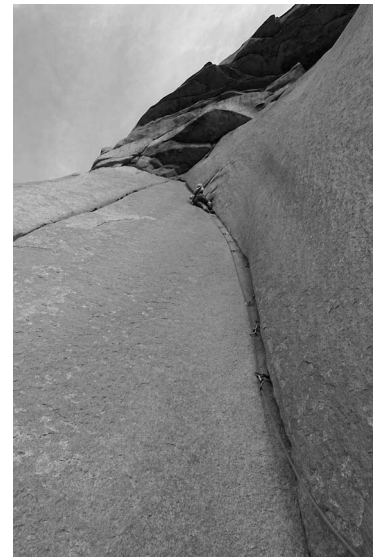
③アタック時は最小限の荷物でスピードをあげ、デポ地まで一日で登る。次の日の早朝テフロンコーナーをレッドポイント。そのまま2ピッチ登りロープを固定してデポ地へ下降し宿泊。翌早朝、固定ロープをユマーリングし日が当たる前にエンデューロコーナーを登りきり、そのままトップアウト。荷物はデポ地に残したまま最小限の荷物で登り、登りきった後は山頂から懸垂下降で戻る。

一言で表すならば極地法である。一度山頂に登りそこから下降しているのもそれ以下のスタイルと言ってもいいかもしれない。この戦略で一度も落ちずに登ったからと言って自信を持って完登したと言い切れるような誇れるものでもなかったし、インチキと言われても否定はできなかった。それでも、妻にとってはそこまでしてでも登りたい対象であり、私も登って欲しかった。そして私たちにとってはそれぐらい厳しい岩壁でありルートだった。

ビッグウォールクライミングにおける様々な要素の中でポイントとなるものは荷上げである。私たちは1日一人当たり3.5Lの水を用意した。比較的余裕のある量と言っていい。フリークライミングにこだわるからには体調をなるべくいい状態に保つことも重要になってくる。水を切り詰めて枯渇すれば翌日のパフォーマンスに大きくマイナスに影響する。但

し、水を増やせばそれだけ荷物は重くなり荷上げの負担は大きくなる。今回のアタックは4日間だったので水だけで28キロの重量があり、その他食料や幕営道具、ポータレッジを含めれば恐らく総重量は50キロを超えていただろう。それを毎ピッチ、リード後に引き上げることは当然ながらクライミング以上に消耗する。それをエルキャピタンであれば30回以上繰り返すわけだから相当な労働だ。特に体の軽い女性には厳しい。今回の戦略では水を含め殆どの物資や装備を事前にデポし、荷上げの負担をできる限り軽くするのが大きな狙いであった。

もう一つエルキャピタンをフリークライミングする上で重要なことは、難しいピッチをトライするタイミングである。南向きの岩壁には日の出から日暮れまで太陽が当たり続ける。11月でもカリフォルニアの太陽は力強く岩壁を照り付け、岩はフライパンのように熱くなる。当然ながら難しいピッチはさらに難しくなってしまう。フリーライ



エンデューロコーナーはルート中でも一際スムーズで美しいクラックだ。



究極のステミング課題と言っても過言ではないテフロンコーナー

ダーで言えば最大の核心となるテフロンコーナーはその名の通り手がかりのほとんどないつるつるの凹角で、そこを極めて微妙なステミングで登っていくわけだが、太陽が当たり始めれば途端に手も足も滑り出してしまう。次なる核心のエンデューロコーナーも甘いフィンガージャムと厳しいレイバックのコンビネーションで、どちらも日が当たりだす前の早朝に限られたチャンスだ。ベストなタイミングで核心部をトライすることが完登への最大の鍵だった。

結果的に妻はほぼこの戦略通りに完登を手にした。登るべくして登ったと私は感じていたが、登る本人が受けていた重圧は計り知れない。1ピッチ1ピッチをスピーディーかつ確実にこなしていかなければ予定通りにことは運ばない。どこか一カ所でも躓けばどんどん後半にしわ寄せがくる。決して簡単とは



核心を抜けても気の抜けないピッチは続く。26ピッチ目の高度感抜群のフィンガークラック。

言えないピッチの連続を失敗なく登り続けるには、登攀能力もさることながらプレッシャーに負けない強い精神力が求められる。様々な困難を克服しフリーライダーを完結させたこのクライミングは、間違いなく彼女の人生における会心のクライミングであっただろうし、私に大きな喜びと勇気を与えてくれた。彼女本人の詳しい手記は山と溪谷社Rook and Snow 88号に掲載されている。



フリーライダー終了点。厳しい垂直の世界はここで突然穏やかな水平の世界に変わる。いったいどれだけのクライマーがここで感慨に浸ったことだろう。

サラテヘッドウォール

フリーライダーの後ヨセミテには強い寒波が到来した。雪が降り続きヨセミテバレーは一面真っ白になった。私はサラテルートフリークライミングを予定していたが、エルキャピタンにも雪が降り積もりそれは極めて困難だった。しばらく悪天が続きそんなヨセミテから思い切ってネバダ州のレッドロックスへの移動を決断する。久しぶりのスポーツクライミングを楽しみながら、ヨセミテの天気予報をチェックし戻れる日を伺っていたものの、なかなか好天は訪れない。12月も約一週間が過ぎ、北米滞在中も少なくなってきた。これ以上の時間が過ぎればサラテのトライは難しくなる。まだヨセミテの天候は安定しなかったが僅かな可能性を信じて戻ることにした。

エルキャピタンは上部にたつぷりと積もった雪から雪解け水が岩壁を滝のように流れていた。サラテルートのように岩壁の凹状の部分を迎えるようなラインは特に流水が多い。岩壁上部の雪が解けきらない限り流水は無くならないだろう。だがサラテの核心部であるヘッドウォールと呼ばれる部分は前傾したフェースに走るクラックを迎える為、その部分は流水の影響を受けていないようだ。

地上から壁の頂を目指していくのがクライミングの本来の姿だが、この状況ではそれは不可能に近い。

ヘッドウォールまでの部分はフリーライダーと共通して何度かそこは登っている。私は壁の上部から下降してヘッドウォールだけを試みるという苦渋の決断を下した。それは相当な妥協であるし、スタイルとしては最悪だ。それで登れたからと言って納得できるはずもない。かと言って何もせずにここを立ち去る気にはなれなかった。今まで蓄えてきた熱い気持ちをぶつける対象を求めていた。こんな発想を生んだのは今の自分とエルキャピタンの距離感にあると思っている。それは寂しい事実でもあった。

通いなれたイーストレッジからのエルキャピタン山頂までの道のりも、雪が積もり気が抜けない状況だった。幸い私たちにはパタゴニアで使用するクランポンなどの雪山装備があったため、通常より時間はかかったものの問題なく山頂に辿り着くことができた。ヨセミテ渓谷とそれを取り囲むハイシエラの



雪を踏みしめてエルキャピタン山頂を目指す。



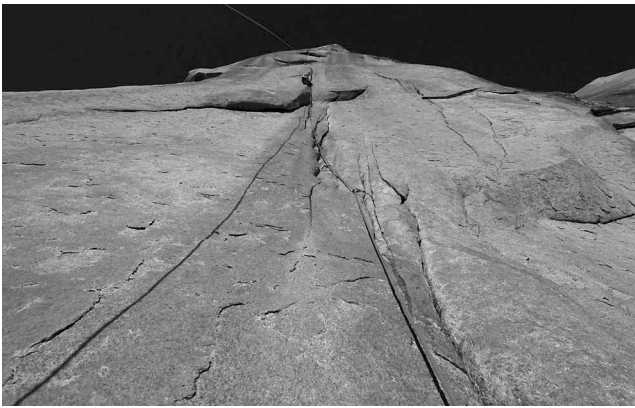
サラテヘッドウォールの懸垂下降。傾斜の強さがよく現れている。

山々は雪を纏い、幻想的な風景が広がっていた。

エルキャピタン山頂からのサラテの下降は何度こなしても、その凄まじい高度感に毎回股間が縮みあがる。ヘッドウォールは15mの13a、35mの13a、15mの13bの3ピッチで構成されている。広大な花崗岩の一枚岩を約65mにわたり一本のクラックが貫いており、そのラインは神々しさを放っている。1ピッチ目はクラックがグループ状でプロテクションが少々悪く精神的な要素もある。トリッキーな動きだったが解決してしまえば思いのほかあっさりと登ることができた。3ピッチ目は傾斜が強いフィンガークラックで、動きはフェース的でボルダリーな内容。このピッチもそれほど苦勞せずに登ることができた。最大の難関は2ピッチ目だった。その長く美しいクラックはヘッドウォールの象徴と言ってもいい。フィンガークラックとフェイスムーブで始まり、クラックはハンドサイズへ。徐々に狭くなるクラックはシンハンドとなり最後の3mで突然フィンガーサイズになりそこが核心部となる。クラック以外のホールドは乏しく誤魔化しはきかない。傾斜も強く少しずつ体力が奪われていく。特にシンハンドセクションは少しでも力を抜けば簡単に岩から剥がされてしまいかかり消耗する。そしてその状態で厳しいフィンガークラックの核心をこなさなければならない。クラッククライミングの神髄とも言えるような内容だった。一つ一つの動きを解明することは早い段階でできたが、それを落ちずに繋げることは、果たして今の自分にできるのか全く自信を持つことができなかった。それでもその神髄と向き合い自分の力を試せることに大きな喜びを感じていた。

天候は好天と悪天が短い間隔で交互に訪れた。晴れて風の弱い日を狙ってヘッドウォールのトライのためにエルキャピタンに上がった。こんな時期にエルキャピタンに登ろうとするクライマーなど当然皆

3. 海外登山記録



人生最高のクラック。サラテヘッドウォール2ピッチ目をトライする筆者。

無だ。この大岩壁で2人だけで過ごす時間は何にも代えがたい贅沢だった。

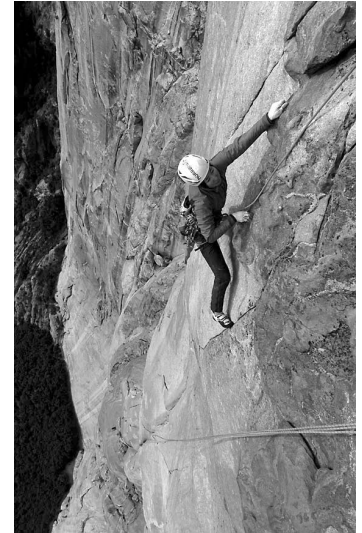
最初は今の自分の実力で登りきる自信の持てなかつた2ピッチ目も、トライを重ねるごとに少しずつ手が岩になじんでいった。はじめは全く力が込められなかったジャミングに徐々に力が伝わるようになっていった。その感覚はクラッククライミング独特のもので、私にとってはそれが洗練されていくと、そのルートと自分が一体となったような気にさせてくれる神秘的なものだ。一度も落ちずにそのクラックを登れたとき、岩が自分を受け入れてくれたとでも言うようなそんな気持ちになる。



サラテヘッドウォール2ピッチ目をフォローする増本さやか

ヨセミテでのクライミング最終日、サラテヘッドウォールは私を受け入れてくれた。それは900mの内

のたった65mに過ぎないが、私のこれまで培ってきたクラッククライミングの全てを捧げた集大成と言えるクライミングだった。スタイルとしては全く納得できない。だがこの世界最高のクラックと言っても過言ではないラインと静かに向き合えたことは、私にとって大いなる財産である。次こそはサラテルートとしてこのヘッドウォールと対峙することを誓い、エルキャピタンを後にした。



サラテヘッドウォール3ピッチ目をフォローする増本さやか

フリーライダーにしるサラテヘッドウォールにしる、そこには冒険性と呼べるものはほとんどなかったと言っていい。冒険性を排除したからこそできる自分の限界への挑戦というものもある。純粋に厳しいロッククライミングに自分の力がどれだけ通用するのか、ヨセミテではそこを追及していた。そういった意味では今回のヨセミテは手応えのあるクライミングができたと思う。そして私たちはこの経験を発揮できる冒険的な環境を求めていた。それが次の目的地南米パタゴニアだった。

パタゴニア

2018年の時と同じクリスマスの日、飛行機とバスを乗り継いでフィッツロイ・セロトーレ山群の玄関口エル・チャルテンに辿り着いた。6度目の滞在となるこの小さな町に戻ってくると郷愁に誘われる。なじみの店を訪れ、一年前と変わらない人々の暮らしに触れる。その雰囲気は私に安らぎを与えてくれる幸せな気持ちになる。毎年のように店が増え訪れる

人も増え続けていたが、この町のサイズ感と時間の流れ方、人々の優しさは変わることなく、ここで暮らしてみたいと思わせる様な大好きな場所だ。世界各地からクライマーの訪れるこの町は再会の場所でもある。友人たちと異国の地で再会し、一言二言ささやかな言葉を交わし、友が変わらず登り続けていることを知るのには旅の大きな喜びの一つである。

「風」で有名なこの地だが、その凄まじさを言葉で伝えるのはなかなか難しい。南アメリカ大陸の南端に位置するこの地は、南極の北側に次々と発生し発達する低気圧の影響を常に受けている。悪天時の富士山山頂で吹くような風が、麓の町でも日常的に吹いていると言えれば少しは伝わるだろうか。風のご機嫌を伺って、まれに訪れる穏やかな日に山に登らせてもらうのがこの地のセオリーだ。今ではインターネットによって比較的精度の高い天気予報が入手できるようになり、日々それとにらめっこし、好天が来ると分かれば町中のクライマーが山へ向かっていく。昔は爆風が吹き荒れる山の中でひたすらチャンスが来るまで粘り、好天が訪れてもそれがいつまで続くか分からないまま凄まじいプレッシャーのもと登山をしていた訳で、現状のパタゴニアでの登山を知る私にとってもそれは想像を絶する世界だし、今とはまるで困難度が違う。この地で登山をすればするほど当時の登山家の偉大さを痛感する。近年パタゴニア地方では、野心的で技術的困難度の高い登山が数多く記録されているが、それは天気予報による恩恵を受けてのものと言えるだろう。とは言え山々は信じられないほど巨大な花崗岩の塊であり、猛烈な風が吹き付けていることに今も変わりはなく、その時代その時代の登山家たちの情熱をぶつける挑戦の場であることに違いはない。

妻をパートナーとしてのパタゴニアでの登山も3シーズン目となる。新ルート開拓やクラシックルー

トからいくつかのピークに登頂した。この間パタゴニア以外でも様々な場所で多くの経験を積んできた。そろそろ大きなピークを目指してもいい頃だ。ヨセミテで培った経験を発揮する対象、それはこの地の最高峰フィッツロイに違いない。フィッツロイに登頂することだけが目的ならば、条件に恵まれればできることは分かっている。私は今までの経験と今持てる力の全てを注ぎ込みフィッツロイの山頂に立ちたかった。私はアグハ・デスモチャーダとアグハ・デ・ラ・シージャの2座を経てフィッツロイの山頂に至るウェイブ・エフェクトというルートを最大の目標に掲げた。それぞれのピークが大岩壁を有し、そのピークが急峻なコルを隔てて連なっている。その岩壁を継続登攀してフィッツロイに至るラインはパタゴニア地方全体でも屈指の美しい壮大なルートだ。その美しさと内容には初めてパタゴニアを訪れた時から惹かれていた。総標高差は約1,900mでエルキャピタン2つ分を上回る。最高グレードは12a、全てのピッチがフリークライミングされている。エルキャピタンで腕を磨いた我々にとって最高で最適な課題と言ってよかった。

今シーズンの山のコンディションは最悪だった。古くからチャルテンで宿を経営する友人は、11月、12月はほとんど毎日のように雨が降ったと教えてくれた。チャルテンで雨ということは山ではたいてい雪になっている。フィッツロイ山頂はほぼ間違いなく雪だろう。麓から見えるフィッツロイは今まで見たことがないほど白かった。ロッククライミングルートを目指している我々にとって山の中の雪や氷は障害以外の何ものでもない。気温もとても低く、町での生活も常にダウンジャケットが必要なほどで、なかなか山に積もった雪や岩壁のクラックに詰まった氷は溶けそうになかった。季節的には夏である。天気の良い暖かい日が訪れれば、この町でも半袖一枚

3. 海外登山記録

で過ごすことができる。そうやってはじめて山の中で快適にロッククライミングをすることができる。今シーズンはそんな日が訪れそうにはなかった。かと言って諦めの気持ちはかけらもなかった。当たり前のことだが登山するチャンスが稀なこの地では特に、悪条件も含め山が差し出す全てを受け入れる覚悟が必要だ。どんな小さなピークであってもそういう気持ちで臨んで初めて山頂に立つことができる。

1月中は本当に酷い天気が続き、ろくに登山ができなかった。一度クラシックルートからアグハ・メルモスを目指すものの、壁からは土砂降りの雨のように雪解け水が降り注ぎ途中敗退を余儀なくされた。町では午前中は10キロほどのハイキングをし、午後からボルダリングやスポーツクライミングを日課として過ごした。ハイキングには足をなまらせないことと山を観察する偵察の目的もあった。天気予報と実際の山の状況を照らし合わせ、コンディションの変化を読み取り、ルートの状態を想像することが重要だった。このことで次の好天が来た時に、それを元にどの山のどのルートなら登れそうか判断することが可能になる。パタゴニアでは忍耐強く待つことが求められる。山への気持ちを切らさずに体の状態を整え情報を収集し虎視眈々とチャンスを伺う姿勢が必要だ。

ウェイブ・エフェクト

2月に入り突然と言ってもいいほどなんの前触れもなくチャンスは訪れた。4日ほどの好天を予報は告げている。日程的にはウェイブ・エフェクトを狙うことができる。問題は気温と壁の状態だ。ウェイブ・エフェクトのラインは南面にあたる為太陽の恩恵をほとんど受けられない。ロッククライミングするには気温の高めの晴天が望ましいが予想気温は低すぎる。また雪や氷も溶けにくい環境にあるので、決して壁の状態はよくないだろう。標高の低めのピー

クの日当たりのいい面を登るのが普通に考えれば妥当なところだった。ただ過去の経験から、結構な悪天後でもトーレ谷から見上げるデスモチャダの南面には、殆ど雪が付いていないのも目にしていた。私の心は大きく揺れ動いた。無難に小さなピークに向かうのか、可能性は薄くとも大きな挑戦をするのか。前者を選択すれば、恐らく楽しいクライミングと成功を手にすることができるだろう。後者を選択すればまともにクライミングもできず失意の下帰って来ることにも容易に想像できた。それでも私は挑戦することを選択した。その為この地に来たのだから。次にいつこのような好天がくるか分からない。これまでの天気傾向を考えれば今年で最後の大きなチャンスかもしれない。分が悪いのは百も承知だが可能性はゼロではない。自分を信じてできる限りの挑戦をしてみよう、そう決意した。準備をすませ出発を明日に控えた日の夜、寝泊まりするトレーラーハウスの窓を雨が激しく打ち付けている。いったいどれだけの雪が山に降りつもっているのか。自分の選択は馬鹿げているのではないか。様々な思いが頭の中をぐるぐる回り続ける。まんじりともしないまま夜が明けた。



ベースキャンプを目指しトーレ谷に行く。

トーレ谷には多くのクライマーが入山していた。どのクライマーの表情からもようやく山に入ることができた喜びが溢れている。目的はそれぞれ違えど、

パタゴニアに集うクライマーの間には不思議な一体感がある。この厳しい環境で山に向かおうとする気持ちに変わりはなく、お互いを尊重し敬う雰囲気心地よい。トーレ谷のベースキャンプから遠望するデスモチャータの南面への雪の付着は、ほとんどないように見える。ひとまずチャレンジだけはさせてもらえそうな状態に、少しだけほっと胸をなで下ろす。同志とも呼べるクライマー達から勇気をもらい、デスモチャータを目指した。

ベースキャンプをゆっくり出発し、一日かけて骨の折れるアプローチをこなした。基部から見上げる岩壁にも目立った雪や氷はなく、手ごたえを感じていた。自分を信じて良かったという気持ちと明日からの期待を胸に眠りについた。

翌早朝予定通りクライミングをスタートした。出だしの7ピッチは傾斜も緩く易しいため同時登攀を交えスピーディーにこなす。大きなテラスに辿り着きここから岩壁は一気に傾斜を増す。そこからの光景に私は困惑した。ルートである



デスモチャータ下部壁をフォローする増本さやか。

コーナークラックに多量の氷が詰まっている。ここは基部から確認できなかった部分だ。そのコーナークラックまでの途切れ途切れのフレイクを辿るラインも、フレイクの中に完全に氷が詰まってまともにロッククライミングはできそうにない。それでもそう簡単に諦めるつもりはない。こんな状況を受け入れてこそそのパタゴニア登山だ。右上方に別のコーナークラックがある。ここには雪や氷の付着がない。

同じ岩壁内でありながらライトフェーシングコーナーとレフトフェーシングコーナーで全く状態が違うことは、とても不思議な現象だ。そのなんの情報もないコーナークラックに向けて、そこに辿り着けるのか分からないフェースを私は登り始めた。顕著なクラックラインでは無いため、プロテクションがどこで取れるか確証はない。一手を伸ばし、一步に立ちこんでいくその動作一つ一つに緊張が走る。そこには奇跡的にもぎりぎりの線でホールドとプロテクションの取れる途切れ途切れのフレイクが繋がっていた。辿り着いたコーナークラックは快適で順調に高度を稼いだ。図らずも3ピッチの新ラインを拓き既成ルートに合流した。ここまでかと思わせる状況を打開したものの感慨に浸っている暇はない。合流した既成ルートは予定していたルートよりも難易度が高く、岩も少々脆かったためスピードは上がらなかった。



未知のラインに可能性を探る。



緊張感から解放され快適なコーナークラックに気持ちよくロープを伸ばす。

気温も低く陽は一切当たらない。凍える手に息を吹きかけながらじりじりとロープを伸ばした。壁の中ほどにある「鷹の巣」と呼ばれる岩棚に辿り着いた時は日が暮れようとしていた。気温もさらに下降し素手でロッククライミングをするには限界に近かった。予定ではデスモチャード山頂付近でビバークの予定だったが、今夜はこの鷹の巣までが精一杯のようだ。大きな棚ではあったが、ごつごつして平らな分はほとんどない。荷物やギアを凹みに押し込みどうにか二人が横になれるスペースを作った。遅い夕食を取りながら、冷静に今日の状況を分析し明日からの行動を検討する。遠目には確認できなかった雪や氷がルート上にあり、気温も低く登攀スピードは上がらなかった。この先もその状況は変わらず今日の遅れを挽回するのは難しいだろう。粘ってフィッツロイ周辺で悪天につかまれば下降することもままらないのは分かっている。だが簡単には諦められない…。葛藤を抱えたままシュラフに潜り込んだ。その気持ちにケリをつけるように、ツェルトの生地をサラサラとたたき音がし始めた。予報は終日快晴だったが、それはあくまで予報に過ぎない。弱い粉雪は明け方まで降り続いた。私はフィッツロイまでの縦走を断念し、デスモチャードの登頂に目標を切り替えた。ここから先は傾斜がゆるみはじめ難易度も易しくなるが、それ故にホールドには雪が積り、それ



ホールドに乗った雪を払いながらデスモチャード山頂を目指す。

を払いのけながらの登攀を強いられた。山頂直下ではあわや敗退かと思わせる様なプロテクションの取れないフェースを、決死のマントリングで切り抜けた。前夜の雪がなければ特別印象にも残らなかったことだろう。「頭のない」を意味するデスモチャードの特徴的な山頂から、まじまじとラ・シージャとフィッツロイを眺め、登るはずだったルートを目で追った。そして次への決意を胸に秘め踵を返した。

チャルテンに戻りまですること、それは山行を振り返ることだ。何がダメで何が良かったか。自分の予想と現状との差。装備の選定。食糧や燃料の量。登攀や行動のタクティクス。天気予報と実際の天気。パートナーと様々な事柄を精査し改善点を見つけていく。その蓄積が当然ながら次の登山に繋がっていく。結果的には一言で言えば私の見積もりが甘かった。山はウェイブ・エフェクトをトライできるような状態ではなかったし、そんな天候でもなかった。だが今の私にとってはそれはトライしてみなければ知ることができなかった。挑戦し体験することしか得られないものがある。次につながる大きな糧を得た私たちは、晴れ晴れとした気持ちで次の好天を待った。

フィッツロイ

またしばらく悪天が続いた。悪天の間に一日程度



夜半からの降雪で薄っすらと雪の積もったビバークサイト。

の好天がぼつりぼつりとある程度だった。このまま今年のパタゴニアも終わってしまうのかと諦めかけていたが、帰国直前に最後のチャンスが訪れそうだ。好天予報は3日間。この前よりは少し気温も高い。山の準備を進めながら再び熟考の日々が始まる。本命はやはりウェイブ・エフェクトだ。だがこの前の好天以降の天気の変化を考慮すると、山の状態はほとんど改善していないだろう。3日間という期間も私たちの実力ではタイトな日程で余裕がない。葛藤のすえ私たちはフィッツロイだけに照準を絞ることにした。フィッツロイには東西南北様々なルートが拓かれている。その中でどこを選択するか。今の山の状態からすれば、アフアナシエフというフィッツロイのルートの中では比較的難易度の低いクラシカルなルートを選ぶのが、最も登頂できる可能性が高いと思われた。だが私たちはただ登頂することだけを目的にここに来た訳ではない。瑞牆山やエルキャピタン、ほか様々なところで築き上げてきた自分達の経験と能力を出し切り、全力を尽くしてフィッツロイの頂に立ちたかった。私たちは北壁に挑戦すると言う答えを出した。北壁は標高差約1,300m。ちょうど中間に大きなバンドがあり、上部と下部に分かれているため、容易に下部と上部で違うルートを組み合わせることができる。私たちは下部をタフエルチェ、上部をエル・フラコ・コン・ドミンゴという二つのルートをリンクアップすることに決めた。このラインは北壁の中でも最も合理的かつ直線的で美しいラインと言える。

普段なら雪のかけらのもないベースキャンプとなるピエドラネグラは、一面雪に覆われていた。石組みのテントサイトもほとんど雪に埋もれている。ショベルなど持ち合わせていないクライマー達は小さなコッヘルで雪をかき出している。そんな状況でもクライマーの表情は明るい。クライマーからはようや

く待ちに待ったクライミングができるという喜びが伝わってくる。翌朝、周りを見渡せば様々な場所でヘッドライトの灯りが瞬いている。その光に少しばかり勇気をもらい我々も北壁を目指した。

果たして北壁はまともにクライミングできる状態なのか。不安は常に頭の中をぐるぐると回っている。それでもロープを結んで登りはじめれば、その状況を受け入れ目の前の岩だけに集中し登ることを楽しめる自分がいることも知っている。圧倒的な迫力の北壁が迫る中、隣のピラー・ゴレッタを登攀する舟生、金坂ペアが確認できた。心の中でお互いの健闘を叫ぶ。北壁に朝日が当たり始めた。デスモチャーダでは浴びることのできなかつた陽光に力がみなぎってくる。太陽の偉大さに感謝する。心配だった傾斜の緩い下部壁もそれほど雪の付着はないようだ。私は水を得た魚の如くロープを伸ばし始めた。中間バンドまでは17ピッチで、ワンピッチだけイレブンがあるほかはファイブテン以下だ。スピードが求められる。とは言えビバーク装備を背負ってのロッククライミングは負荷が高く、思い通りにピッチを稼いでいくことはできない。午後になると雪解け水がクラックの中を流れ始めたものの、そんなことは気にせず濡れたクラックに手足を躊躇なく突っ込み先を急ぐ。悪条件をものともせずに突き進むのがパタゴ



フィッツロイ北壁下部をフォローする増本さやか。重いバックパックが肩に食い込む。

3. 海外登山記録



午後になりクラックには雪解け水が流れ始めた。そんな悪条件を受け入れるのがパタゴニアのクライミング。



厳しい登攀の疲れも忘れ美しい夕陽とそれに染まる山々に見とれる。

ニアのロッククライミングだ。夕方には場所によっては壁の中を滝のように水が流れ始めたが、幸いにもルート上にそのような箇所はなく、日暮れ前になんとか中間バンドに辿り着いた。広々としたバンドに快適なビバークサイトを構築し、一日の緊張感から解放される。西側のピエールジョルジオの山稜とその先に広がる広大な南氷床、そしてさらにその向こうに



快適なビバークサイトとそそり立つ圧倒的な上部壁。

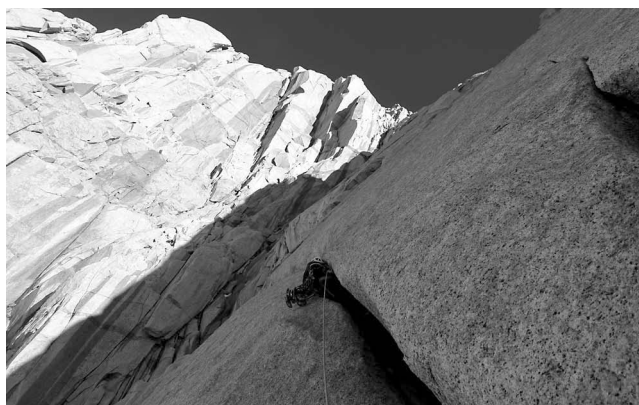
沈む夕陽の美しさにしばし目を奪われる。背後には傾斜を増した上部壁が凄まじい迫力でそそり立っている。明日の登攀への不安と期待を胸にシュラフに潜り込んだ。

微風快晴、最高の天気のもと二日目の登攀を開始した。上部壁は下部壁に比べ傾斜が強くほぼ垂直で所々オーバーハングしている。ルートは無数に走るクラックの一つを辿っている。ルート図では稜線までが11ピッチと数で言えば昨日よりも少ないが、ほとんどのピッチが60mのスケールで登攀距離は下部壁を上回る。アルパインスタイル、オンサイトフリーで拓かれたルートであり、当然アンカーもランナーも残置ボルトなどは一切ない。岩を読む力が試される。2ピッチ目にいきなりノープロテクションの5mほどのスラブが現れた。墜落すれば小さいカムやストッパーで構築された、決して完璧と言えないアンカーに墜落荷重がかかる。難度もファイブテン程度はあり決して易しいとは言えない。一瞬「敗退」の二文字が頭をよぎる。相当な緊張感の中、時間をかけ一歩一歩じっくりと歩みを進めた。切り抜けた時は深いため息とともに、どっと疲労感が押し寄せてきた。まだ始まったばかりだというのに先が思いやられた。やはりと言うべきか、その先もどのピッチにも癖があり、気の抜けるピッチは一つもな



胃の痛くなるようなスラブのランナウトを切り抜け傾斜の強いクラックシステムに入る。

かった。ほぼすべてのピッチにワイドクラックのセクションがあり、奮闘的でスピードも上がらず体力を奪われた。それに加え下からは確認できなかった雪や氷がクラック内に詰まっていたグレード以上に困難にさせた。核心部である7ピッチ目11bのオーバーハンクしたワイドクラックを奮闘の末無事に登りきり、この先は易しいピッチが続くと安堵したのもつかの間、次のピッチを目にしてその希望は打ち砕かれた。僅かに左に上昇する、体が半身入程度のフレアーしたワイドクラックが、水平に伸びている。しかもクラックの奥には氷が詰まっていたプロテクションが取れそうにない。再び「敗退」の二文字が頭に浮かぶ。しかしここまで来て簡単に諦めるわけにはいかない。私は意を決して腹ばいになり半身をクラックの中にねじ込み、絶対吐き出されまいと全身に力を込め匍匐前進を始める。墜落への恐怖で冷静になどなっていられない。ただ我武者羅に死に物狂いで前進した。どうにか精根尽き果てる前にプロテクションが決まり大分気が楽になった。その先は氷も少なくなりなんとか真の核心部を足元にした。そこからは順調にヘッドランプの明かりを頼りに稜線に抜けアファナシエフルートと合流した。ビバーク適地にはお決まりのように硬い氷のような雪がたっぷりと積もっていた。おもちゃのような軽量アックスで時間をかけて雪をかき出し、テントの中に入る



見た目以上に苦しいワイドクラックを腹ばいで進む。



凄まじい高度感のアファナシエフ上部。

ころには日付が変わっていた。岩壁は登りきった。あとは山頂へと続く易しい岩稜を辿るだけだ。

セロトーレの西側に雲が湧き始めた。今日は少しずつ風が強くなる予報だ。下降で強風につかまれば命に関わる。予想していたよりも長く、難しい岩稜を同時登攀を交えスピーディーに登っていった。そして私たちは誰もいないフィッツロイの山頂に立った。果たしてこの山頂にどんな意味があるのだろうか。恐らくここに立とうが立てまいが私の人生はほとんど変わることはないだろう。それでもなぜこんなにも一生懸命にここを目指すのか。私には分からない。分からないけれどどういう訳か自分でも信じられないような力を発揮することができる。山を登ることでしか知ることのできない自分がある。それが登山の不思議な魅力でもあるし、私が山に登る理由なのかもしれない。



360度の大展望が広がるフィッツロイ山頂直下の稜線。

3. 海外登山記録

町ですれ違うクライマー達の顔は黒く日に焼け、言葉を交わさなくても充実した登山をしてきたことを物語っている。私たちは慌ただしく帰国の準備に追われた。5カ月という月日もあっという間に過ぎ去りこの旅もう終わる。友人たちとの再会を誓い合い、名残惜しい慣れ親しんだ町に別れを告げた。同時に車窓に輝くフィッツロイに向け、心の中で再訪を誓った。

旅における日常はとてもシンプルだ。食べることと寝ること、それに自分達のやりたいことただそれだけで日々は過ぎていく。そんな日々は非日常、非現実の世界だろうか。現代社会の日常はあまりにも多くの情報にとらわれ生活を複雑にしている。本当に自分のやりたいことを見失い、それほど自分にとって重要でもないことに時間や労力を費やしてはいないだろうか。私は旅のようなシンプルな時の流れを理想として、日常を営んでいきたい。

旅は私自身にとっての幸せの意味や人生において重要なこと、本当に必要な物は何かということを感じさせてくれる。私は自分が夢中になれる無償の行為がなんなのか知っていて、それを中心に生きられることを幸せに思う。それは時間と共に変化していくのだろう。私はこれからも旅の教えを元に、その時その時自分が夢中になって取り組めるものを見いだし、それを大切に生きていきたいと思う。



フィッツロイ山頂にて。